

第4回時評「2004年、羽ばたく女性の起業」

2004年の新たな年が始まりました。人生80年を時間に換算すると70万時間になり、そのうち生涯労働時間は7万時間とされています。

女性労働協会のアンケートによると女性が起業をしたい理由は「年齢に関係無く働きたい」、「好きな分野で仕事をしたい」、「自分の裁量で仕事をしたい」といったものが上位を占めています。女性たちにとって積極的な仕事のスタイルである起業は生きがいにつながる一つの手段とも思われます。

「200X年。秋葉原からエクスプレスで45分の緑あふれる田園都市。そこで生活する星子さんは昨年までは専業主婦でしたが今は社長です。といってもオフィスも従業員もありません。彼女の職場は芝生に囲まれた自宅の中にあり、そのリビングの一角の真っ白な机の上のパソコンと社名『(株)小さく始めるコーポレーション』が彼女のオフィスです。この街では、『生活者のまなざしから生まれる女性の起業』セミナーを開いてからこのような人たちがとても増えたということです。」……わたくしは初夢から覚めました。

IT時代の到来により時間と空間を意識しない環境が私たちの生活にもたらされました。特にこれまで家事や育児のもと十分な社会活動が制限されていた女性たちに新たな道が拓かれたのです。情熱・アイデア・経験を持っていけば家庭にいながらにして仕事を行うこともできるのです。デジタル化された道具とネットワークによる交流はアイデアをたやすく市場にもたらしビジネスに展開することを可能としました。今や、キラッとしたひらめきを自ら“かたち”にできる事が重要となってきたのです。そのような中「小さく始める起業」はハイリスク型のベンチャーに比べると異なる存在意義を持つと思われれます。拡大や利潤の追求を目的とするのではなくプロセスの中にその本質が隠されているのです。例えば星子さんはこれまでの専業主婦の生活の中で培った「食生活」に“安全”と“もてなしの心”を加え地域社会にサービスを展開しています。つまり、身の回りにある課題を見つけ解決方法を考え実践しその結果、人々に喜ばれ報酬を得るといった活動です。冒頭のアンケートにもあるように多くの人は年齢に関係なく働きたいと考えています。いつまでも社会に必要とされている自分を感じることは生きがいや自己実現につながる大きな喜びです。川の流れのように過去から未来へ止まることなく生きがいの小船を漂わせることのできる、それが「小さく始める起業」ではないかと思えます。

経済と生きがいの両立という課題を抱えながらも多くの女性たちによる起業の隆盛は明るい社会への活力を生み出す源泉になると思えます。女性の感性や生活技術が大切な資源となり女性の起業が2004年に羽ばたく事を期待します。 以上